
再生の天使と魔法少女たち

金髪碧眼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再生の天使と魔法少女たち

【Nコード】

N0943BA

【作者名】

金髪碧眼

【あらすじ】

ELSとの対話から50年後。外宇宙を航行していた刹那・F・セイエイは異世界に来てしまう！刹那は異世界に変革をもたらすことはできるであろうか!?

プロローグ

ELSとの対話から50年が過ぎようとしていた

対話を成功させた人類初の『純粹種のイノベーター』でその身と愛機にELSの一部を融合させた『ダブルオークアンタ』のガンダムマイスター『刹那・F・セイエイ』は愛機を駆り、外宇宙を航行していた

そんなある日、ヴェーダ（テイエリア）からの情報で今刹那のいる宙域で謎のエネルギーを感じたという情報が届いた
その調査を受けた刹那は、その宙域を隈なく調査した

「…センサーに異常はない」

いくら調査をしても何も発見できない

「だが、ヴェーダの情報が間違えているなんてことは…」

それはありえなかった

ヴェーダが提示してくる情報には必ず何かある。刹那はそう思った
すると、今まで何も反応しなかったセンサーがいきなり反応した

「なっ！あれは…！」

視線の先には黒く渦上になっている空間がある

しかも、その空間はあたりのデブリを粉々にして吸い込んでいた
ELSの時も木製近辺の星を吸い込んでいた

「っ！機体が…」

クアンタが吸い込まれていたのだ

操縦レバーを動かしてもクアンタは反応せず、ただ流れていくだけ

「うわああああああああああっっっ！！！！」

そして機体ごと刹那は吸い込まれてしまい、目の前が真っ暗になっ
てしまった

プロローグ(後書き)

頑張るっす

魔法の世界

「ここは……地上？」

いつの間にか森の中に立っていた刹那
服もパイロットスーツから外に出るときに着ていたいつもの私服に
変わっていた
手を見てみたら、手は銀色にはなっておらず元の褐色の肌に戻って
いた

「なぜ俺はここに……？」

刹那の疑問に答える者は誰もいない……はず

「知りたい？」

「っ！誰だ!？」

「マスターの後ろだよ？」

後ろに振り向くと、そこには白と水色のドレスのような服を着てい
た少女が立っていた
腰まで伸ばした水色の髪を下げて、綺麗なエメラルド色の瞳。顔立
ちはどこかフェルトに似ていた

「初めまして……じゃ、おかしいかな？」

「……」

「僕はダブルオークアンタだよ」

「クアンタ……なのか？」

「うん。僕もどうしてこうなったのかはよくわからないんだよ。でも、今の状況は説明できる」

「っ……教えてくれ」

クアンタもどうして人の姿になっているのかわからない。だが、おそらくはあの時の黒い空間が関係しているのは間違いないかった。そうしてクアンタの説明が始まった

「マスターはあの黒い空間に吸い込まれたのは憶えているよね？」

「ああ」

「多分、僕がこの姿になっているのはそのせいだとは思っただよね。クアンタと刹那の考えることは同じようだった

「マスターが起きるまで色々調べてみたんだけど……」

「何かわかったか？」

「ここはマスターがいた世界じゃないんだよ」

「何？」

「この世界はマスターたちが暮らしていた世界じゃなくて、あらゆ

る可能性を持った世界『パラレルワールド』なんだよ」

「…」

驚いて声も出ない刹那。過去にクアンタで量子ワープを行なったことがあったが、今回はそれを大きく超えている事態が今刹那の身に降りかかっていた

「…他に分かったことはあるか？」

「うん。どうやらここは『地球』じゃなくて『ミッドチルダ』っていう『魔法』が発達した世界だよ」

「『魔法』？」

彼の頭の中では御伽噺の魔法だと思った

「この世界の魔法はちょっと変わってるんだよ。魔法を使うためにはその人に『リンカーコア』っていうガンダムで言えば『GNドライヴ』みたいなものがあるって、その人たちのことを『魔導師』っていうんだよ。そしてその魔導師は『デバイス』っていう機械を使って戦うんだよ？」

「随分と科学に近い魔法なんだな…」

「僕もそう思うよ」

「他に分かったことはあるか？」

「ううん。僕が調べられるとしたらこれが限界だった」

「そうか。……なら、お前のことに関しては？」

「僕も詳しいことまではわからないけど、僕がどういった存在かは理解してる」

「それで？」

「僕はこの世界で言うデバイスなんだよ。体を持っているデバイスはそうはいないけど」

「待て。そうなる俺にもリンカーコアというものはあるのか？」

「うん。マスターにもあるよ。ちなみに魔力ランクはAA+だけど……」

「それは少し高くないか？」

「僕はそうは思わないけどな」

可愛らしく首をかしげるクアンタ
だが、クアンタは目付きを変えてある方向を見る

「マスター、こちらに接近してくる機影を30機確認したよ！！」

「何っ!?!」

「でも、僕たちならこれくらい簡単に殲滅できるよ!！」

そうしているとその機影が現れた

そのうちの一機が刹那たちに向かってレーザーを放った

「くっ！」

それを後ろに飛んでなんとかかわす

「大丈夫!？」

「問題ない。それより、どうしたらいい？」

「簡単だよ！僕の名前を呼んで『セットアップ』って言って!!」

「了解！『クアンタ、セットアップ!!』」

クアンタが青白い粒子となって刹那の体を覆い尽くす

青白い粒子『GN粒子』が周りを埋め尽くし、空に一本の柱となつて舞う

粒子がだんだんと形を作っていく、機械的な青と白の装甲となる
体を様子を見てみる刹那

「これは…『ダブルオーライザー』か？」

かつて刹那を変革させた彼のかつての愛機

「うん。魔導師はねデバイスの力を使って『バリアジャケット』を体に纏わせて戦うんだよ。で、ダブルオークアンタはまだ使えないから今はそれで我慢してね？」

「いや、これで十分だ。ありがとうクアンタ」

「う、うん／＼」

クアンタの声が若干上ずっていたのは刹那は気のせいであると思った

「行くぞ！」

「うん！」

「ダブルオーライザー、刹那・F・セイエイ、目標を駆逐するー！」

魔法の世界（後書き）

OPとED募集！

機動六課

私、高町なのは新しく新設された機動六課でスターズという分隊の隊長をしています

私は今、ガジェットが出現したという知らせを受け親友のフェイトちゃんとそこに向かっています

「最近ガジェットの出現が増えてきてない？」

「うん。でも、そのために私たちがいるから」

そんな話をしながら空を飛んでいる私たち

「それよりもさっきガジェットの他に別の反応なかった？」

「えっ？私は気がつかなかったけど…」

どうやらフェイトちゃんはわからなかったようです。私の勘違いだったのかな？

すると、前方に淡い青白い粒子が空中に舞っていました

「何っ!？」

「これはっ!？」

私たちは驚きましたが、それは最初だけでした

「綺麗…」

「うん。そうだね…」

その粒子で私は心が暖かくなっていくのを感じました
私たちはそれに見とれてしまいました。が、突然強力な魔力反応を感じました

「なに！？この魔力！」

「行こう！なのは！」

「うん！」

フェイトちゃんにそう言われた私は急いでその場に飛んでいきました

「目標を、駆逐する！」

両手に持ったGNソード？をソードモードにして敵を両断する刹那
火花が散り、スパークを起こして爆発した
すぐさまライフルモードに切り替え、敵を狙い撃つ

「なに！？」

だが、ビームは敵に当たる直前で消えてしまった

「あれは『AMF』だよ！」

「なんだそれは？」

「マスターの攻撃は全部魔力で出来ていて、AMFはその魔力を防御するシールドみたいなものだよ」

「だからか…」

「GNソード？のビームじゃ少し火力不足かもしれないよ？」

「なら、切り裂く！」

ソードモードにして、刹那は再び敵に接近する

「ここは、俺の距離だ！」

敵を横にまっふたつにして破壊する
どンドン敵を切り崩していく刹那

「くっ！」

敵の攻撃を避ける刹那
後ろの交代をして、呼吸を整える

「クアンタ、GNソード？を出せるか？」

「うん！任せて！」

腰にGNソード？をマウントして、右手が光り出す

光が消えると、そこには折り畳まれた大剣と三つの発射口のライフルが装備された

折り畳まれた『GNソード？』を展開して刹那は敵に襲いかかる

「これなら！」

再び敵に切りかかり、破壊していく

ライフルモードにして、敵を撃ち落としていく。ビームはGNソード？より強力になり敵を貫く

「マスター！あとラスト一機！」

「了解！」

最後の機体にGNソード？の刀身を向ける

GNソード？は淡く輝いていた

(どの世界でも争いというものはなくならない。現にこの世界でも戦いが起きている。なら俺は争いを生むものを、世界の歪みを破壊する！)

(僕はマスターと戦いたい！僕はいつだってマスターと一緒に戦うんだ！)

GNドライブの回転数が上がり、放出口からGN粒子が溢れる
そして残る一体に向かっていく

「そつだ！これが！」

「俺たち（僕たち）のガンダムだ！！」

敵をGNソード？で一閃！

なのはとフェイトが現場に到着していたときには既に戦闘は終わっていた

青と白の騎士甲冑のような、でも機械にも似たものを着ていた男性が煙の中に立っていた

「あの人かな？」

「わからない。一応警戒はしておいたほうがいいと思う」

「うん」

二人はその男に近づく

「えっ！？これってガジェットの残骸！？」

フェイトが驚きの声を上げた

二人の足元にはガジェットの残骸と思われるものがそこらじゅうに転がっていた

なのも驚いていた。実際ここまでの数を一人で相手にするのは困難である

だが、あの男性はそれをやってのけた

二人の頭の中には単純に『強い』の一言しか出てこなかった

「聞いてみよう」

「そうだね」

そう言って二人は男に近づいて、声をかけた

「あゝ、すみません」

「敵機、反応はないよ」

「そうか」

刹那は地上に降下して、辺りを見回す

さっきの機体の残骸がそこらじゅうに散らばっていた

「これからどうするの？マスター」

「…わからない。だが、これからどう動くべきかを考えなくてはな」

「これからは迂闊には動けないでしょうね。現にこうやって襲われ

「だから」

刹那とクアンタはこれからどうするかを考える

「！マスター、こっちに近づいてくる魔力がある。さっきより強い」

「敵か？」

「わからない。でも、人のようだよ？」

「なら、そいつらに話を聞く」

「バリアジャケットはどうするの？」

「一応このままで構わない」

「わかった」

「すみません」

後ろから声をかけられた。声からして女性だ

後ろを振り向くと、そこには白いドレスのような服を着ている茶髪のツインテールの女性と黒い服に白いマントをつけた金髪のツインテールの女性が立っていた

「：お前たちは何者だ？」

疑問に思ったことを聞く刹那

「私たちは時空管理局です。少しお話を聞かせて欲しいんですけど

…」

「時空管理局？」

「（マスター）」

頭にクアンタの声が響いた
いきなりだったので驚く刹那

（クアンタなのか？）

「（これは、思念通話と呼ばれる魔法の一種だよ。僕に心で話しかけてくれればできるよ）」

「（どうか？）」

「（うん。聞こえるよマスター）」

「（クアンタ、聞きたいことがある。時空管理局となんだ？）」

「（いろいろな次元世界を管理している組織だよ。まあ、連邦と同じと考えてくれれば）」

「（そうか。ありがとうクアンタ）」

「（ううん！マスターのためだから、これぐらいは当然！）」

「（ああ。ありがとう）」

「（うう／＼／＼マスターに褒められたよ／＼！）」

クアンタがどうして喜んでるのは刹那にはわからなかった

「あの〜、聞いてます?」

どうやら念話に気を取られ、彼女たちの話を聞いていなかったためか無視していると勘違いしたようだ

「すまない。それで、その管理局が俺になんの用だ?」

「はい。あなたがこのガジェットを倒したんですか?」

金髪の女性から質問が出た

(あれがガジェットか…)

聞いたことがない言葉が出てきたため、刹那はさっき自分が倒したあれがガジェットだろうと判断した

「ああ。急に襲われたからな」

「詳しいことを聞きたいので私たちの付いてきてくれませんか?」

「了解」

「マスター、バリアじえケット解除していい?」

「えっ!?!声!?!」

「どこから!?!?」

二人はクアンタの声に反応して驚いている

「いいぞ」

「は〜い！」

そして刹那のバリアジャケットが解除され、刹那のとなりには粒子が集まる

「人！？」

茶髪の女性が声を上げた

「ユニゾンデバイス？」

「違うよ〜」

すると少女の、クアンタの体が粒子となり刹那の右手の薬指に集まっ
つていく

そこにはGN粒子と同じ青白い色の宝石が付いた指輪があった

「僕はどちらかと言ったら『インテリジェントデバイス』だよ。
ただ、擬人化ができるところだけが違うだけだから」

「へえ〜そうなんだ」

「シャーリーが見たら、きっと…」

「じゃはは…」

「マスター、僕疲れたから少し休むよ……」

「ああ。ゆっくり休んでくれ」

「あつ自己紹介が遅れました。私は時空管理局機動六課所属のスタ
ーズ分隊の隊長を務めている高町なのはです」

「同じく機動六課所属、ライトニング分隊の隊長を務めているフェ
イト・テストロッサ・ハラオウンです」

（この若さで隊長を務めているのか……）

二人の自己紹介を聞いてそう思った刹那

「あなたの名前を聞かせてもらっていいですか？」

「俺の名前は刹那・F・セイエイ。そして俺の相棒のクアンタだ」

三人はへりで機動六課の隊舎に戻り、そして刹那は二人にある部屋
に案内された

中に入ると、そこには椅子に座ったショートカットの女性と銀髪の
手のひらサイズくらいの妖精？がいた

「高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、ただいま任務を終えて帰還しました」

「うん。ご苦労さん。いつもどおりでええよ。おかえり」

「ただいま。はやてちゃん」

「ただいま」

「それで、その人が報告にあつた…」

「刹那・Ｆ・セイエイだ」

「私は機動六課部隊長を務めさせてもらっている八神はやてといいます」

「リインフォース？ですう〜！」

はやてとリインと刹那は軽く挨拶を済ませて早速本題に入る

「では、早速本題に入ります。刹那さん、あなたはどうしても森にいたんですか？」

「わからない。黒い渦上の何かに吸い込まれていつの間にかあそこにいる。だが、こいつのおかげでこの世界のある程度のこととは理解した」

そう言って右手の薬指にある指輪を見せる

すると、指輪が光り出して刹那のとなりにも光が移動する

光が消えるとそこに少女が立っていた

呼吸が困難な状況なのだ

「プハアツ！助けてえ〜！マスター！」

なんとか顔だけ脱出することに成功して、刹那に助けを求める

「この子何！？めっちゃくちゃ可愛えやないか！」

「その子は刹那君のデバイスのクアンタちゃんだよ！」

「えっ！？この可愛さでデバイスやなんて嘘つくのはあかんで！？
なのはちゃん！」

「マスター〜！」

そこから約30分はやてはクアンタを愛で続け、それを止めるため
になのはとフェイトとリインは悪戦苦闘を続けた

刹那はそれをため息をつきながら見守っていた。内心面白がっていたのは秘密だ。刹那のキャラじゃねえ！by作者
はやてから解放されたクアンタは涙目で刹那の後ろにしがみつき、
怖がっていた

「さて、その子のことについて教えてくれませんか？刹那さん」

急に態度が変わったはやて

あまりの変化に刹那とクアンタは少し恐怖を覚えた
ちなみにはやてに反省の色は見られない

「でも、本当に珍しいよね。ユニゾンデバイスじゃないのに擬人化
してるなんて…」

「それは私も思った。さつきクアンタは自分はインテリジェントデバイスに似た存在だとも言ってたし」

なのはとフェイトが言う

「僕にもよくわからないよ。気がいたらこの姿になってたんだもん…」

「刹那さんはどこで「敬語はいい」「じゃあ、刹那君はどこでクアンタちゃんを？」

「それは「僕が話すよ…あの怖いけど」…無理はするなよ」

どうやらはやてはクアンタにとっては恐怖の対象となってしまうたようだ

そしてクアンタからの説明が始まる。刹那がこの世界とは違う地球『並行世界』から来たことなどを話した

刹那の過去は当然言わないが…

「なんかしっくりこないな。平行世界って言われても…」

「うん。でも説明を聞く限りでは刹那は『次元漂流者』になるってことだよな？」

「次元漂流者？」

「うん。事故などが原因で次元を超えて流れ着いた人のことを言うんだよ。簡単にいえば迷子かな？」

フエイトの説明で納得した刹那

「今のところ、管理局も平行世界に干渉できるような力はあらへんからな。」

「…つまり刹那君、行く宛がないってことだよな？」

「ああ」

「はやてちゃん、いいよね？」

「うん。刹那君、機動六課に協力してくれへん？」

「…理由は？」

「民間人が無断でデバイスを持つことは禁止になってるんよ。ですが、民間協力者となればそれを未然に防ぐことができるので、しかも管理局は今人員不足だから力を貸して欲しいんよ」

「…分かった。それでいいな？クアンタ」

「僕はマスターと一緒にならそれいいよ？」

「はい。では、これからよろしくお願いします」

これで刹那とクアンタは機動六課に協力することが決まった

「これからよろしく頼む」

「うん！これからよろしく！刹那君、クアンタちゃん！」

「よろしく刹那、クアンタ」

「はいですう〜！あと私のことはリインって呼んでください！」

「よろしく〜！！」

クアンタは元気に挨拶をする

すっかり打ち解けた刹那たち。ちなみにクアンタのはやて恐怖症は未だに発病中である

「せやリイン！二人に六課の案内よろしくな！」

「はい！わかりましたはやてちゃん！では、いきましよう！」

「ああ。頼む」

「うん！！」

そしてリインは刹那とクアンタを連れて部屋を出ていった

三人が出ていったあと、なのはとフェイトは刹那がガジェットを倒したことにものすごく驚いていた

はやてが二人にクアンタに嫌われたことを言うと、「はやて（ちゃん）が悪い！」と一蹴されてしまった

機動六課（後書き）

感想とか待ってます！

F W 部隊

「ありがとう！リイン！」

「どういたしましてですう！」

刹那とクアンタはリインに六課の内部を案内され、クアンタとリインは結構仲が良くなった

今三人は刹那とクアンタのこれから過ごすための部屋の前にいた

「今日からお二人が使用するお部屋ですう！中は好きに使って構わないですよ」

「すまない。感謝する」

「それでは、また明日」

「またねえ〜！」

「クアンタちゃんもまた明日〜！」

クアンタとリインは本当に仲が良くなっていった

リインが見えなくなるまで手を振り続けるクアンタ。刹那はそれとずっと終わるまで見ていた

リインが見えなくなり、クアンタは笑顔で刹那と共に部屋に入ってしまった

「最低限の生活用品はあるようだな……」

「マスター〜！」

「どうした？」

「ベッドが一つしかないよう？」

「…」

クアンタの発言で刹那は固まってしまった

「クアンタ、お前はベッドで寝ろ」

「ええ〜！マスターと一緒に寝たい！」

拒否をするクアンタ

刹那は頭を悩ませるが、特にこれといった手段はない

「マスター…」

上目遣い+涙目で刹那を見る

クアンタは実際は指輪になって眠ることもできるが、今は擬人化して刹那と寝たいようだ

「…ハア〜、今回だけだぞ？」

「やた〜！〜！」

すごく嬉しそうなクアンタ。テンションがものすごくhighになっていた

それを刹那はため息を吐きながら、口元を綻ばせてみていた

「とにかく今日は休もう」

「うん！」

そして刹那は今日いろいろなことがあったのですぐに意識は闇に落ちた

クアンタは刹那の隣で嬉しそうに共に眠った
刹那の右腕を抱きしめながら…

翌日、刹那は朝早く起きた

起き上がるうとしたら右腕にクアンタがしがみついていたので、どう抜け出そうか悩んだ刹那
けっこう力が強めだったため拘束を解くのに10分もかかってしまった

「さて、どうする？」

クアンタの拘束を解いたのはいいが、特にすることがない

「…筋トレでもするか」

そして刹那はトレーニングを始める。腕立て伏せ、腹筋、スクワットを1000回ずつすることに決めた

腕立てを終え、次に腹筋を始めた。それを5分で終わらせる。彼は

化け物か！？by作者
スクワットをはじめよつとする刹那

「ふわあ〜」

「…起きたか」

「ああ〜マスターだ〜。おはよ〜」

クアンタが起きた。あくびをしながら目をこすり、少しクラクラしながらベッドから出る
瞼を重たそうにして、本当に見た目はただの少女である

「…顔を洗ってきたらどうだ？」

「はい」

そう言っつて顔を洗いに行くクアンタ
少しふらついていたので無事に行けるか見守る刹那
無事にたどり着いたようなので少しホッとする

「そろそろ、朝食にするか…」

「私も行くよ〜！」

顔をシャキッとさせたクアンタが元気よくでてきた
そして二人は部屋を出て、昨日案内された食堂に向かう

二人が食堂に向かっている途中

「？なんの音だろう？」

「わからない。だが、これは爆発音か？」

かすかに聞こえてくる音を刹那は爆発音だろうと考えた

「…行ってみるか」

「うん！行くう！」

二人はその音がしたところに足を運ぶ

「わあ〜！マスター、街が浮いてるよ！」

子供のようにはしゃぐクアンタ

刹那は心の中で「俺のガンダムはこんなにも子供だったのか…」とつぶやいた

クアンタの言うとおり、たしかに海のと真ん中に街というより廃墟が浮いていたのだ

「あつ！刹那君、クアンタちゃん、おはよう！」

こちらに気がついたなのはが二人に手を振る

なのはの隣には知らない二人組がいた

「おはよ〜!!」

「おはよう…!」

テンションが天と地の差のある二人

「この男が主が言っていた…!」

「うん。次元漂流者で今日から民間協力者として六課に協力する刹那・F・セイエイ君だよ」

「刹那・F・セイエイだ」

「私はマスターのデバイスのクアンタだよ〜!」

凜とした雰囲気を持つ背の高いピンク色のポニーテールの女性

「私はシグナムだ」

勝気な感じがあるオレンジの髪をツインテールにした背の低い少女

「ヴィータだ」

四人は軽く挨拶を済ませる。すると、シグナムが

「いきなりですまないが刹那、私と模擬戦をしてくれないか?」

どうやらバトルマニアの血が騒いだようだ

「なぜだ？」

「新しく入ったお前の実力が知りたいただけだ」

「…了解」

「（すまねえな。シグナムのやつバトルマニアだから、ただ単にお前と戦いたいただけなんだよ）」

「（構わない。俺もやることがなかったからな）」

シグナムに代わって念話で謝罪をするヴィータ

「決まったね。それじゃあ…みんな…！訓練一旦中止！」

なのはがそう言った

すると、刹那たちのところに向かってくる四人の子供がいた

「なのはさん、何かあったんですか？」

活気が溢れている青い髪の少女がなのはに聞く

「うん。その前に自己紹介だね。民間協力者の刹那・F・セイエイ君だよ」

「刹那・F・セイエイだ。名前で呼んでもらって構わない」

「僕はマスターのデバイスのクアンタだよ…！よろしくね…！」

「そしてこの子達が私の教え子でFW部隊のメンバー、みんな自己紹介」

「はい！スターズ03、スバル・ナカジマ二等陸士であります！」

「スターズ04、ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「ライトニング03、エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「ライトニング04、キャロル・ルシエ三等陸士であります！
こっちは使役竜のフリードリヒ、フリードって呼んでください」

「キョクッ」

竜を見て刹那は改めて自分が異世界にいるのだと自覚したが、問題はFW部隊の年齢だ

スバルとティアナはまだわかるが、問題はエリオとキャロだ

二人はどう見てもまだ10歳くらいの子供だ

これを見た刹那は管理局には何かあると考えた。はやくは人員不足と言っていたが、子供まで戦わせる必要があるくらい不足しているのか？

誰も何も思わないのか？

「自己紹介は済んだな。では早速模擬戦を始めるぞ！刹那！」

「了解！クアンタ！」

「うん！」

クアンタが指輪になったことになのは以外の全員が驚く

「早くはじめよう」

「あ、ああ」

そして二人は廃墟に足を運んだ

「それにしてもすごいよね。海の上に廃墟が浮いてるなんて」

「実はそれ本物じゃないんだ」

モニターが現れ、そこにはなのはが映っていた

「ホログラムのようなものか？」

「うん。そんなところかな？」

なら、ここの技術は下手したらソレスタルビーイングの技術を大きく超えているのではないか刹那は思った

「すごいね〜！マスター！」

「ああ」

「そろそろ構わないか？早く始めたいのだが…」

すでにシグナムは騎士甲冑を身に付け、右手には剣を持っていた

「すまない。行くぞクアンタ！」

「うん！」

「クアンタ！セットアップ！」

「なに、あれ？」

「綺麗ですね…」

「はい…心が温かくなっていく」

「心が癒されていく感じですよ…」

FWの四人から淡々と感想が述べられる

「にやはは…最初はそうだよね」

「私も最初は見とれちゃったよ」

「あれ？フェイトちゃん、いつの間に」

「うん。模擬戦があるって言うから」

なのはといきなり現れたフェイト

「あいつ何者だよ？」

ヴィータの質問に答えられるものは今は廃墟にいた

シグナムは刹那の変わった姿に見とれていた

いや、正確には後ろの翼のようなものから放出されている青白い粒子
『GN粒子』にである

「その姿は…？」

「これが俺たちのガンダム『ダブルオーライザー』だ」

「フツ。では始めるか？」

「ああ。クアンタ、GNソード？」

「はい！」

そして刹那の両手に粒子が集まり、その手に二本の剣が握られる

「では！ヴォルケンリッターが将！烈火の騎士シグナム、参る！」

「ダブルオーライザー、刹那・F・セイエイ、模擬戦を開始する！」

FW部隊（後書き）

感想を待っています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0943ba/>

再生の天使と魔法少女たち

2012年1月3日04時51分発行